

# 専門図書館における利用と保存 ——一橋大学社会科学古典資料センターの取り組み

床 井 啓太郎 (一橋大学社会科学古典資料センター)

## はじめに

一橋大学社会科学古典資料センター(以下「センター」)は、法学・経済学など社会科学系の西洋古典資料を集中的に管理することを目的として、1978年に附属図書館より分離して設立された専門図書館である。センターでは、所蔵している資料を利用者の利用に供するだけでなく、資料の保存や、蓄積された成果の発信などについて、大学の中の専門図書館である特徴を活かしてユニークな活動を行っている。以下、これらの活動の紹介を通して、センターの専門図書館としての特色を見ていきたい。

## 1. 社会科学古典資料センターについて

### 1.1 センター概要

社会科学古典資料センターは、附属図書館に隣接する3階建ての施設で、1階が閲覧室、工房および事務室、2、3階が書庫として使用されている。職員数は現在9名で、内訳は、センター長以下、センター教授1名、専門助手2名、図書系職員1名、保存修復工房スタッフ4名である。

大学内では学内共同教育研究施設として位置付けられており、部局に附置されていない独立の機関として全学の研究・教育の支援に当たっている。利用者は、学内者・学外者の比率が半々程度と学外者の利用の多いことが特徴で、学内者に限れば、院生および教職員の利用が95%を占めている。資料は参考資料を除いてすべて閉架式の書庫に排架されており、利用者の求めに応じて職員が出納する方式になっている。資料の貸出は行っていないが、閲覧はセンター閲覧室において学内者・学外者を問わず可能である。複写については、資料保護のため一旦マイクロ化、電子データ化を行った上で、紙媒体に落として利用者に提供している。



写真1 センター閲覧室

蔵書数は約75,000点で、そのすべてが大学の貴重書指定を受けている資料である。収蔵対象は1850年以前に出版された洋書およびマニュスクリプト類で、附属図書館の新規購入分も含めて上記の条件に該当する資料は、自動的にセンターに配置される体制となっている。また、刊行年代に基づいて収蔵される資料のほか、研究者が残した文庫を中心とするコレクション資料も、蔵書の中核のひとつとなっている。

### 1.2 蔵書の特徴

センターの蔵書は、法学・経済学等の社会科学系を中心に、歴史学・哲学などの人文科学系の資



写真2 センター書庫

料も幅広く含んでいる。また、蔵書の中核をなすコレクション資料は、含まれる資料一点一点の価値に加えて、コレクション全体の収書の傾向や資料への書き込み等から旧蔵者の思考の軌跡を追うことができる点でも重要である。

コレクションのひとつで、オーストリアの経済学者カール・メンガーの旧蔵書であるメンガー文庫は、約20,000点の資料からなり、収蔵されている資料は、経済学、社会思想関係のみならず法学、歴史学から旅行記に至るまで非常に幅広い範囲に及んでいる。特に経済学については、マルサス、リカード等の古典派経済学の主要著作から、メンガーと同じ限界効用学説に立つワルラス、ジェヴォンズの著作に至るまで系統的に収集がなされている。メンガー本人による書き込みが随所に見られることも特徴で、特に主著である『国民経済学原理』の著者特製本(書き込み用に1ページ毎に白紙部分が挿入されている)は、将来の改訂のためのメモが無数に書き込まれており、センターの所蔵資料の中でも特に重要な資料のひとつである。この『国民経済学原理』改訂版は結局出版されることがなかったため、特製本に残されたメモは、近代経済学の祖のひとりであるメンガーの思想の形成、その後の発展過程を知る上で欠かすことのできない貴重な手掛かりとなっている。

アメリカの古書商にして古典文献のリプリントでも知られるバート・フランクリンの旧蔵書であるフランクリン文庫は、社会科学系の大文庫であるゴールドスミス、クレス両文庫にも所蔵されていない貴重な資料を数多く含んでいる。刊本以外にも7,000点にも上るパンフレット類、約600点のマニュスクリプトが特徴的だが、特筆すべきは16点のインキュナブラ(グーテンベルクによる活版印刷技術の発明から1500年までの約50年間に出版された極初期の活字印刷本)を含む点であろう。これらの多くは世界で数点から数十点しか現存が確認されていない稀観書で、写本から印刷本への移行期の書物の様態を伝える貴重な資料である。メンガー文庫に含まれる5点と合わせてセンターが所蔵する21点のインキュナブラは、我が国の国

立大学の中では最大のコレクションとなっている。

このほか、ドイツの法学者オットー・フォン・ギールケの旧蔵書で、法学を中心に10,000点の資料からなるギールケ文庫、我が国における経済哲学の創始者である左右田喜一郎の旧蔵書で、哲学思想関係資料が充実している左右田文庫、ロシア革命前後の社会主義運動に関連する資料約1,200点からなるバルンシュタイン・スヴァーリン文庫などが重要なコレクションである。

## 2. 目録管理

蔵書を管理・利用するための基礎として、センターでは目録の整備を重視してきた。また電子目録の普及以降は、積極的に遡及入力を行ってきた。冊子体目録は比較的早い時期に大部分が完成していたが、時代的な制約もあって完成度にばらつきがあったり、誤りが散見されていたことも遡及入力を急いだ理由のひとつであった。古典資料の目録作成には語学や主題専門分野についての素養を必要とするため、フランクリン文庫の遡及入力作業においては、目録作成担当者のほかに主題分野について専門知識をもつ大学院生を雇用して、両者が協力しながら目録作成を行う体制をとった。現在のところ、フランクリン文庫およびメンガー文庫については文庫全体の遡及入力完了しており、ギールケ文庫、左右田文庫についても順次入力を進めているところである。

目録の入力と登録は、国立情報学研究所のシステムを通じて行っているため、目録規則は適用が指定されている英米目録規則第2版(AACR2)を使用している。その上でセンターの特徴として、1850年以前の資料については『稀観書の書誌記述』を適用している点が挙げられる。『稀観書の書誌記述』は、18世紀以前に印刷された出版物や、手刷り印刷本などの目録作成に使用することを想定して作成された、AACR2における初期刊本に関する規程(2.12-2.18)の拡張版Bibliographic description of rare books. Washington, D.C., Library of Congress, 1981を、センターで邦訳し

て出版したものである<sup>1)</sup>。この目録規則は、タイトル、出版事項などについて、省略や転置を行わずにより表示形に即した形で記述できる点や、判型などの形態的特徴や出版事項などを、西洋古典資料に特徴的な表示や様態に合わせて記録できる点が特徴となっている。これによって、同タイトルであっても一点ごとに異なる特徴を持つことが多い古版本や、パンフレット類、一枚ものなどを、資料の状態に合わせてより正確に記述することが可能となった。

『稀観書の書誌記述』の規定については、AACR2との記述の違いを中心に西洋社会科学古典資料講習会(後述)でも解説を行っており、テキストの内容はセンターホームページから確認できる。

### 3. 資料の保存

#### 3.1 保存修復工房

センターの大きな特徴のひとつとして、古典資料を研究者等の利用に供する専門図書館であるのと同時に、出版から時を経て常に物理的な劣化の脅威に晒されている資料を保護し、後世へと伝える保存図書館としての役割も強く意識している点が挙げられる。西洋古典資料の保存のために、センターでは専門の工房である「保存修復工房」を1995年にセンター内に設置し、常時資料の修復・保存を行っている。保存修復工房には現在4名の専門スタッフが配置されており、中長期的な保存計画に基づいて資料一点一点の修復・保存処置を行うほか、書庫内の保存環境の整備にもあたっ

ている。工房の活動によって、2010年現在で約54,000点の資料の修復・保存処置が完了しており、計画では、2017年までに所蔵している資料全点の処置を終えることを目標としている<sup>2)</sup>。

センターでは、新規に受け入れられた資料を、まず低温処理(-40℃の冷凍庫で1週間)によって殺虫し、資料を食害する加害虫が書庫内に入ることの予防している。資料は一点ごとに状態を確認して、サイズや素材、構造、劣化状態等を細かくカルテに記録する。その後、記録されたデータをもとに修復・保存の方針が決定され、破損箇所の修理や保革油の塗布、保存箱や保護ジャケットの作成などが行われる。蔵書印は押さず、請求記号シール、バーコードなども貼付しない。請求記号とバーコードは中性紙のスリップに貼付して、これを資料に挟んで管理している。資料本体には請求記号などが一切記入されないため、万一スリップが脱落した場合には、その資料を識別できなくなる恐れがある。それにもかかわらず、この方式を採用しているのは、利用上の利便性よりも保存上の危険の回避をより優先するセンターの保存方針と、完全閉架式かつ貸出が不可で、常に目の届く範囲で資料を管理できるセンター特有の環境があるためである。

保存・修復を必要とする資料は一点一点状態が異なっており、また貴重書の学外への搬出は容易でないため、施設内に設置された工房で一点ごとの状態に合わせて対応するシステムは効率的かつ有効に機能していると言える。また、資料の利用



写真3 保存修復工房



写真4 和紙を使った修理の様子

時の破損や、書庫内でのアクシデント等に即座に対処できることも利点の一つである。

保存修復工房は、センターが資料を管理し利用者に提供する一連の流れの中で、欠かすことのできない役割を果たしているが、財政的な裏付けが弱い点が大きな課題となっている。工房はセンターの運営費ではなく大学後援会からの支援で運営されており、現状ではまとまった単位の事業が終了するごとに、新たに工房運営費の拠出を申請する必要がある。工房の活動をセンター運営と一体のものとして位置付けて、恒常的に活動が可能な基盤を整備することが今後の課題であろう。

### 3.2 保存方針と実践

前段では、センターにおける資料の保存方法について述べたが、勿論この方法があらゆる図書館に同じように適用できるわけではない。図書館や資料室が資料を保存するにあたってとるべき方策は、その図書館が自分たちの図書館と資料の性質をどのように認識していて、利用と保存のバランスの中でどのような図書館のあり方を目指すかという方針から導かれ決定されるべきものであるからである。その意味で、こうすればよいという決まった保存対策や方法があるわけではなく、「正しい保存対策」は図書館の数だけ存在すると言える。

このことはまた、資料の保存上最も望ましい方法が、必ずしも無条件に図書館が選択すべき保存対策となるわけではないことも意味している。例えば、資料に登録用のバーコードを直接貼付することは、その素材に不可逆的な影響を与える点で、純粋に資料保存の見地からすれば明らかに望ましくない。だが、ある図書館の所蔵資料が、利用頻度の非常に高い、破損すれば新規に購入することを前提にしているような性質のものであって、利用上のメリットが保存上のリスクを上回ると判断されれば、当然バーコード貼付も選択肢のひとつになると言える。同様に、センターの保存対策も、単に保存技術上の必然ではなく、あくまでセンターの保存方針に基づいた選択の結果であるこ

とに留意する必要がある。

保存方針の決定やそれに基づく局面ごとの判断は、利用と保存の要請の間で図書館をどのように運営するかという基本方針と結びついているため、常に慎重に検討される必要がある。センターではこれらの方針を検討したり、判断を必要とする場合には、資料管理の専門家として図書館職員、資料保存の専門家として工房スタッフ、さらに専門助手が常に協議を行うようにしている。また、月に1回、センター教授と専門助手、図書館職員で打ち合わせを行い、状況の報告や今後の方針の確認を行っている。センター内のスタッフで判断がつかない場合や、助言を必要とする場合には、外部の製本・修復技術の専門家、保存科学の専門家の意見も参考にしている。

## 4. 専門職員とセンターの運営

専門図書館と保存図書館の両方の要素を持つセンターの日々の運営と、局面ごとの判断の要となっているのが、専門職員の存在である。センターには図書系専従の職員として採用されている図書館職員のほか、保存に関しては製本や書籍修復を専門とする工房スタッフが常駐する体制となっている。加えて、主題専門分野について知識を持った専門職員として、センターに2名配置されているのが「専門助手」と呼ばれる一橋大学独自の職員である。以下この職種について簡単に紹介したい。

### 4.1 専門助手

大学図書館において、自館の所蔵資料について高度の専門性を発揮しつつその管理やサービスにあたることができる人材をどのように養成するか、もしくは確保するかという問題は長年の課題のひとつであったが、一橋大学においても、附属図書館や古典資料センターは、それぞれ和書、洋書の古典資料を数多く所蔵していることから、主題専門知識を持った職員の配置はかねてより望まれていたところであった。センターに限って言えば、設立時からセンター教授、助手が配置されて

いる体制であり、このうち助手はセンターに常駐して資料管理やサービスにおいてもその専門性を発揮し得る立場にあったが、着任から数年程度で他機関に移るケースも多く、継続して図書館の管理に携わることが難しい状況でもあった。こうした中、主題専門分野と図書館運営の両面に専門性をもってあたる人材として、2007年よりセンターに2名、附属図書館に2名配置されたのが、専門助手という新しい職種であった。

この職制が新たに導入された際に、同時に定められた「一橋大学における専門助手に関する規則」によると、専門助手とは「高度の専門性を持ち、他の補助業務のものでは代替不可能な補助業務について設ける職種で、大学院博士後期課程を修了した者又はこれと同等以上の専門的な知識、技術又は経験を有する者」と定義されている。また、センターで専門助手を公募した際には、「西洋社会思想史もしくは西洋経済(思想)史、または図書館学もしくは西洋書誌学その他これに準ずる学問分野の専門的知識を持つ」ことが要件となっていた。任期は5年で、再任は1回まで認められている。

センター専門助手はセンター助手と附属図書館学術企画担当を兼任しており、それぞれの立場でやや性質の異なる業務を担当している。センター専門助手としては、特に主題専門分野に関係する業務を担当しており、いわゆるサブジェクト・ライブラリアン的な仕事もここに含まれる。具体的には、所蔵している古典資料の目録作成や資料管理を行うほか、利用者に対するレファレンスサービス、電子化事業の管理、センターで開催される展示や講習会の企画・立案・運営、機関誌や出版物の企画などが主要な業務である。また、修復・保存や書庫管理の方針決定を保存修復工房のスタッフと連携しながら行っているほか、講習会では書誌学の講義を担当している。その他、文科省の科学研究費を用いてセンターの所蔵資料を対象とした書誌学的研究を行う計画も、今後進めていく予定である。センター助手としては、購入資料の発注から、ホームページの管理、概算要求の提出

までセンターの運営全般に携わっており、また、附属図書館学術企画担当としては、附属図書館に所属する専門助手と協力しながら、図書館で開催される展示の企画のほか、学部生や院生のアカデミック・ライティングの指導などにも関わっている。

専門助手という職種が図書館の中に配置されたことで、どのように図書館が変わり、またそれによってどのような効果をもたらされたかについては、まだこの職種の導入から日が浅いこともあり、今後の評価を待つ必要があるだろう。ただ、一橋大学における専門助手の採用は、日本におけるサブジェクト・ライブラリアン導入の先駆的なケースとも言え、同様の職種が今後我が国の図書館に浸透していくかを占う上で、責任は重大であると感じている。

## 5. 成果の共有と発信

### 5.1 講習会

センターで蓄積されてきた西洋古典資料についての研究成果と、保存・管理・利用についての知識、経験は、講習会などの機会を通じて学外の機関や個人と積極的に共有されている。講習会は、資料の研究法や書誌学、整理や保存等について学ぶ西洋社会科学古典資料講習会(以下「資料講習会」と、古典資料の修復や保存の実技を学ぶ西洋古典資料保存講習会(以下「保存講習会」)に分かれているが、今年度で開始からそれぞれ30回、11回を数え、参加人数も資料講習会が延べ約920人、保存講習会が約70人に達する歴史をもっている。

資料講習会は、例年11月に4日間・全11コマの日程で講義を行っており、内容は「古典研究」、「書誌学」、「保存・修復」の3分野に分かれている。「古典研究」は、西洋古典資料を扱う上で、資料の背景や研究動向などへの認識を深めることを目的として、西洋史、西洋思想などを専門とする研究者に、特に自らの研究と書物を絡めた内容で講義を担当していただいている。「書誌学」は、モノとしての書物の特徴からその本の造本工程や来歴などを解き明かす分析書誌学の講義のほか、

西洋古版本の目録作成などの実践的な講義が含まれる。「保存・修復」は、センターの保存修復作業に実際に関わっている製本家や、保存の専門家に、古典資料の修復や保存に関する講義を担当していただいている。

保存講習会は、例年7月に3日間・全9コマの日程で、基本的に資料講習会を修了している者を対象として開催している。この講習会では、修復・保存についてのより詳しい内容の講義を行っているほか、実技の演習を行っている。実技ではカルテの作成から書見台の作成、革装本の手入れ、簡単な紙の修復作業、保存箱の作成などを、講師と保存修復工房のスタッフが指導している。保存講習会は定員が8名と少人数のため、実技をほぼマンツーマンに近い形で指導することが可能で、講師とやり取りを重ねながら保存に関するひとつおりの技術を学ぶことができる。また、ここで習得した知識、技術は、それぞれの大学、機関に持ち帰って、さらに広く共有していくことが期待されている。

これまでのところ、両講習会の受講者は、大学とその類縁機関の関係者がほとんどであった。これは会場の収容数や実技指導が可能な人数などから、受講者の募集先を絞ってきたためでもあったが、延べ受講者数も相当数に達し、大学関係者に対してはある程度講習の成果が浸透しつつあると感じている。来年度以降は、これまでお断りすることが多かった企業内図書館などからの受講希望



写真5 保存講習会

者も受け入れていく予定であるので、こうした機関に所属して古典資料に触れる機会が多い方々にも、今後は是非講習会に参加していただければ幸いである。

## 5.2 講演会・展示・出版

このほかセンターでは、西洋古典資料に関する研究成果を共有・発信する場として、例年1回のペースで講演会を主催している。講演会は主に研究者を対象としているが、昨年の講演会では、準備期間中に研究者と他大学の図書館職員などを交えて数回に渡って勉強会を開き、別会場でのシンポジウムでは図書館職員による発表も行われた。また、講演会に合わせて、センター展示スペースを使って特別展示を開催する試みも行われた<sup>3)</sup>。これらは、研究の場と図書館をつなぐ試みとして、今後も機会があれば続けていきたいと考えている。上記のような特別展示のほか、センター所蔵資料を中心に2ケースほどのスペースで紹介する小規模なセンター展示も、年数回のペースで開催している。展示は、センターが所蔵している資料を学内外で紹介する場であるのと同時に、センター職員にとっても自館が所蔵する資料を再確認する貴重な機会となっている。

また、センターでは学術誌の発行を行って、西洋古典についての研究成果を発信している。「一橋大学社会科学古典資料センター年報」は、所蔵資料や文庫の紹介、研究ノートなどを中心に掲載しており、年1回発行されている。「Study Series」は西洋古典に関する研究論文を、基本的に1論文につき1冊の形で年数回出版しているもので、現在までに64号を数えている。「センター年報」と「Study Series」のうち、著者の許諾を得られた論文については、一橋大学機関リポジトリHERMES-IRからも全文を公開している。

## おわりに

紙幅の関係で駆け足になったが、センターの専門図書館としての活動の中でも特に、資料保存の取り組みと、それを支える専門職員の存在、そこ

から生まれる成果を共有する仕組みを中心に紹介した。資料の利用と保存のバランスをどのようにとるかという問題について、古典資料センターは、特に保存を強く意識する資料室であり、あくまで利用が前提となる図書館のあり方としては、やや特殊な例と言えるかもしれない。ただ、資料の保存や保管は、現物としての資料を所蔵している限り、どの図書館にとっても避けて通れない課題である。企業内図書館や研究図書館、大学図書館など多様な館種を含む専門図書館の、それぞれの館が抱える個別の課題や問題意識と本稿の内容が上手くリンクするのにか心許ないところではあるが、利用と保存をめぐる専門図書館のひとつの対応として、センターの事例が何かの参考になれば幸いである。

(とこい けいたろう)

<註>

- 1) [アメリカ合衆国議会図書館] 整理サービス局記述目録方策担当室編；岡崎義富訳，稀観書の書誌記述：AACR2，ISBD(A)形式による稀観書及びその他の特殊印刷資料の記述目録規則．一橋大学社会科学古典資料センターStudy Series. 1986, no. 11
- 2) センターの保存対策の詳細については以下を参照。増田勝彦，岡本幸治，床井啓太郎．西洋古典資料の組織的保存のために．一橋大学社会科学古典資料センターStudy Series. 2010, no. 64
- 3) この講演会の内容については、企画のコーディネートをを行った野呂康氏(成城大学非常勤講師)のホームページでも紹介されている。  
<http://yasushinoro.web.fc2.com/actu.html>

専門図書館における利用と保存——一橋大学社会科学古典資料センターの取り組み

床井 啓太郎 (一橋大学社会科学古典資料センター)

一橋大学社会科学古典資料センターは、1978年に附属図書館から分離して設立された専門図書館で、1850年以前に出版された社会科学系の西洋古典資料を中心に約75,000冊の資料を所蔵している。センターでは、所蔵する資料を利用者の利用に供する以外にも、「大学の中の専門図書館」の特徴を活かして様々な活動を行っている。センター内に設置された保存修復工房では、専門のスタッフが所蔵資料の修復や書庫内環境の整備にあたっている。センターで主催している2つの講習会では、これまでに蓄積された研究成果や経験を他機関と積極的に共有している。また、古典資料の目録作成やレファレンス、展示など、主題専門分野への知識を必要とする業務にあたるために、専門助手と呼ばれる独自の職制を導入しているのも特徴のひとつである。本稿では、これらの特徴を紹介しながら、センターの専門図書館としての特色を示した。